

土曜塾

座かんさい 第1回「土曜塾」レポート

野村 充

2009.1.10(土)

「座かんさい」の同人が自らの「ものづくり」について語る土曜塾のトップバッターとして、建築家の立場からお話をさせていただきました。そもそも建築とは何かというメタレベルの話ではなく、建築デザイン



野村 充氏

を実践する現場で、何を考えてどのようにデザインをやっているのかをお話するという土曜塾の趣旨にそって、私の生い立ち、ものづくりに対する考えや建築デザインにおける主題についてお話をし、竹中工務店時代と独立後の作品、現在進行中のプロジェクトの紹介をさせていただきました。「ものづくり」とは自己表出であり、優れたもの(作品)は優れた自己による表出の結果であると考えています。生まれた場所と環境、そこでの生活の記憶、どこで何の教育を受け誰に師事したかといった経験、自己を磨くための研鑽など、それら全てが今ある自己に統合されています。建築家にとって故郷という場所は時にその建築家の全てであるように感じる場合があります。プリッカー賞を受賞したメキシコの建築家、ルイス・バラガンにとっての故郷グアダハラへの郷愁、サクラダファミリアを設計したアントニオ・ガウディにとっての故郷の岩山の風景などは、彼らの建築の中心に存在するものです。オランダの建築家レム・コールハースの建築に見られるシークエンシャルな空間には、映画のシナリオライターを経て建築家になった彼の自己が明瞭に表出されていることも指摘しました。そんなわけで、私が伊勢で育ち、伊勢神宮や五十鈴川を遊び場に使っていたことなどの話から始めて、アメリカの設計事務所での経験と、その後の世界の建築家との交流などもお話ししました。

私の建築デザインの主題に関しては、「接続」というテーマでお話しました。その意味は、①建築は建築に固有の価値のみを追求しようとする社会から孤立する、②環境や自然、風景、都市、歴史、文化、ITなどの外部に「接続」させることで、建築の価値や社会的意味を高め、建築デザインの可能性を開く、というものです。重要なことは、建築と外部をいかに濃密に「接続」させるかということです。接続の密度が高いほど建築は揺らぎ、変容し、新たな姿をともなって立ち上がることになるからです。そのためには時として建築は接続した外部の力に負ける必要があります。より受容であることが、建築と建築家に求められていると考えています。スライドによる作品紹介では、「接続」という主題が実践としてどのように展開されたのかを、ランドスケープデザイナーや照明デザイナーなどとのコラボレーションのプロセスなどの話をまじえて紹介させていただきました。その後の皆さんとの議論は、もう少し時間があればより内容の深いものになったのではと感じました。次回以降、土曜塾がさらに充実してゆくことを願っています。



建築美術工芸同人

座かんさい